



緒言

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2014-06-09 キーワード: 作成者: 橋本, 邦彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3303

緒言

著者	橋本 邦彦
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	12
ページ	1-2
発行年	2014-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3303

特集「渡島半島東岸部の漁業関連方言語彙調査」:

緒言

橋本 邦彦

平成 23 年度に採択された科学研究補助金「旧榎法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」(課題番号:23520540)は、平成 25 年度で最終年を迎えることになった。この期間中に行われた実地調査を通して、相当数の漁業に関わる語彙と地元で保存された漁具や文献資料に出会うことができた。また、私たちの発表した論文や研究報告に接した方々から、貴重な文献とそれに付随した情報を寄せていただく機会を得た。これらの豊かな集積物の土台の上に、本特集が成立したと言ってよいだろう。

3 年間の調査・研究によって明らかになった事柄が 2 点ある。1 点目は、漁業に関連する語彙が、それをを用いる人々の生活環境と密接に関わっているということである。漁業を営む場所の置かれた地理的条件、捕獲される魚種と漁具・漁法、天候、風向き、潮流などの自然条件等、様々な生態学的要因が、語彙の形や意味に無視できない程の影響を及ぼしているのである。2 点目は、方言語彙の広がりとそこに見出される共通性と相違性に着目することの肝要さである。私たちの出発点は、旧榎法華村を中心とする、いわゆる下海岸地域の方言語彙であったが、調査・研究の深化と共に、隣接する地域、すなわち、渡島半島西岸部及び津軽海峡を隔てた津軽半島、下北半島をも視野に入れる必要性を認識するに至った。それは、特定地域からの入植という北海道特有の歴史と、境界のない海を相手にする漁業という生業の普遍性から必然的に生まれた要請である。渡島半島東岸部の語彙の実態を解明するためには、隣接する周辺地域の語彙の姿をしっかりと捉えておかなければならないのである。

この特集に収録された 3 編の論文は、平成 25 年 8 月 28~29 日に旧榎法華村(現在、函館市富浦町)で実施された調査の成果に基づいている。橋本論文は、生態学的要因の主要な部分を成す風、潮・波に関連する方言語彙を「使う」、「聞いたことがある」、「使わない」の 3 つの項目に分類してまとめた労作である。各地の町村史、郷土史家の手になる自費出版文献、方言辞典等に掲載された項目情報を比較できる形で取り込み、実地調査で入手した新たな知見を加えた点で、従来にない方言語彙集が提示されている。島田論文は、榎法華方言話者に観察される「潮」、「潮」の発音の特徴を、音響音声学の手法を用いて丁寧に分析した研究である。この発音の形が、従来の文献に言及されていないものだけに、方言語彙の発音研究に道を開く可能性を秘めている。塩谷論文は、道南方言とハワイ語の水産物語彙を比較したユニークな視点に立つ研究である。道南地方と同様に海に囲まれたハワイも、古くから漁業が盛んであり、多くの水産物が消費されてきた。両者に見られる共通点と相違点から、生態学的要因の普遍性と特有性の対応が明ら

かにされる。

この緒言を結ぶにあたって、本語彙調査を支援して下さった方々にお礼を申し上げたい。2000年の調査の時から10年以上の長きに渡って協力して下さった故玉村栄吾氏に心からの感謝とご冥福をお捧げする。玉村氏の船大工としての経験や知識、人脈の豊かさ並びに純粋な郷土への愛情に触れられなかったなら、これほどの長期間、地道な調査を継続することはできなかつただろう。また、函館市新八幡町の小市光子氏にも心からの感謝を申し述べたい。調査協力者を探し求めていた時に、快く知り合いの漁師の方を紹介して下さった。新たな調査協力者を得て、私たちは調査・研究を続ける勇気を与えられたのである。最後に、函館市富浦町に在住の田中末廣・美枝子ご夫妻に感謝申し上げたい。忙しい漁の合間に、私たちの質問に丁寧に答えて下さったばかりか、予期していなかったような興味深いお話を披露して下さったので、多くの貴重な資料を手にすることができた。地元の方々の惜しみない協力と支援があればこそ、私たちの研究は前に進むことができる。現在、手元に漁具、漁船等に関わる写真や映像資料が数多く収集されているので、語彙からその指し示す写真や図が検索できるデータベースを作成して、調査対象地域に提供するということを約束して、この稿を閉じたい。